二代目松林伯円『小説番町皿屋舗』の位置づけと意義

―「皿屋敷もの」の系譜と展開を視野に入れて―

根来　麻子

はじめに

「皿屋敷」伝承は、数ある古典怪談の中でも広く知られた存在であるが、そのストーリーや細部の設定は、決して一様ではない。舞台となる場所が、江戸の「番町」か「播州」姫路かという違いに始まり、時代設定や登場人物の肩書き・人物造型などにも幾多のバリエーションがある。「青山」「お菊」「皿」「井戸」という共通項を軸にしつつも、現代に至るまで、時代ごとのメディアが様々に変容させてきた怪談である。

その話型の変遷を追う上で看過できないのが、実録・講談における「皿屋敷」である。講談における「皿屋敷」は、宝暦八年（一七五八）に刊行された、馬場文耕の『皿屋舗弁疑録』（以下『弁疑録』と略称する）を基盤とする。江戸番町を舞台とした「皿屋敷」伝承の作品化としては最古のもので、本作において、舞台となる時代および土地、青山・お菊の人物設定等の基本的な枠組みが形成された。その後も、現代に至るまで変容を続けていくが、明治期以降の講談における「皿屋敷」の系譜を考える上で、とりわけ重要な位置を占めるのが、二代目松林伯円の手に成る『小説番町皿屋舗』である。基本的な枠組みを『弁疑録』に依りながらも、登場人物や結末を大きく異にする本作の話型は、明治・大正期を経て、現在口演される講談にも継承され、また、映画・ドラマにも少なからぬ影響を与えている。しかしながら、これまでに詳細な梗概の紹介や考察が行われておらず、「皿屋敷もの」の系譜の中にも位置づけられていないのが現状である。

本稿は、『小説番町皿屋舗』（以下、『小説』と略称する）の話型の特徴について、『弁疑録』および、同時代に上演された歌舞伎の「皿屋敷もの」との比較から分析するとともに、当該作品が、その後の講談、および歌舞伎・映画等の諸芸能にどのような広がりをもたらしたのか、可能なかぎりの考察を加えるものである。

1，「皿屋敷もの」の系譜

『小説』の作品分析に入る前に、皿屋敷伝承および、伯円以

前に作品化された「皿屋敷もの」の系譜について概観しておく必要がある。先行研究に依りつつ、概要を示す。

皿屋敷伝承として、比較的古い文献にみえるものは、『本朝故事因縁集』巻二（元禄二年（一六八九）刊）所収の「雲州松江皿屋敷」である。皿を割ってしまった下女が井戸へ沈められ、その後夜な夜な現れて皿を数えるが、僧の機転によって成仏するという話である。舞台は松江で下女の名も記されないが、「皿屋敷」伝承の原型が認められる。本譚を紹介した小二田誠二氏は、話の主眼が、下女の幽霊を解脱させる僧の頓智にあることを重視し、伝承の担い手として説教僧の関与を示唆している[一]。

播州を舞台とした皿屋敷伝承としては、『播陽万宝知恵袋』（宝暦十年（一七六〇））所収の「竹叟夜話」（永良竹叟著）が挙げられる。「竹叟夜話」は天正五年（一五七七）の奥書を持つ。実際に室町期の成立とは考えにくい点もあるという[二]が、少なくとも、『播陽万宝知恵袋』の書かれた江戸時代中期までは下らない時期の成立であろう。山名氏による統治下の播磨国が舞台となっており、花野という女性が、拝領の品である鮑貝の盃を紛失した濡れ衣を着せられ、主である小田垣主馬助（山名氏重臣）によって殺されるという筋立てである。「お菊」「皿」「井戸」という道具立てこそ出てこないものの、播州を舞台にした「皿屋敷」伝承の原初的な形態と位置づけられる。

一方、江戸の番町を舞台とした伝承としては、斎藤月岑『武江年表』（嘉永三年（一八五〇））の記事が挙げられる。承応二年（一六五三年）のこととして、「正月二日牛込御門の内青山某の婢女きくといふもの、主家にて秘蔵の皿を破りて害せられ其霊魂祟りをなせし事」とある。もっとも、月岑自身、「多くは附会の談なるべし」とするように、当時の出来事とみる信憑性は薄い。また、『久夢日記』（文久年間）には天和元年（一六八一）のこととして、菊岡沾涼『江戸砂子』（享保十七年（一七三二））には「むかし」のこととして、類似する話が記されている。細部に相違はあるが、「下女が皿欠損の罪によって折檻され殺される」という枠組みにおいて共通する。これらの記録は断片的で、年代も信憑性に欠けるものが多いという[三]が、三田村鳶魚は、皿屋敷の怪談が元禄以前に遡れないことから、正徳二年（一七一二）の『当世知恵鑑』（都の錦作）に収載される、江戸牛込を舞台とした類話（「牛込の亡霊」）に注意を払い、「皿屋敷の怪談も貞享元禄の頃に製造されたものらしい」と述べている[四]。もっとも、起承転結を備えた体系的な作品が作られるのは、享保年間に入ってからのことである。

芸能・実録等、作品としての「皿屋敷もの」は、大枠として、播州姫路を舞台にした室町時代のお家騒動物と、江戸番町を舞台にした江戸時代前期の土地因縁譚とに大別される。前者では、青山鉄山はお家乗っ取りを企む悪臣で、その奸計を聴いてしまったお菊は皿紛失の罪を着せられて殺される。後者では、青山主膳は旗本・火付盗賊改で、奴下女のお菊は家宝の皿を過失で割ってしまい、責めを受けて自害する。以下、前者を〈播州〉型、後者を〈番町〉型と呼ぶことにする。

芸能としての最古の上演記録五は、享保五年（一七二〇）六月の歌舞伎『播州評判錦皿九枚館』（京都・榊山座）が挙げられる。番付だけで作品の詳細は不明だが、「播州」「青山てつさん」「おきく」という役名がみえることから、播州を舞台にした内容であったとみられるという六。また同年八月にも、歌舞伎「皿屋敷」（大坂・金子座）の上演記録がみえる七。

続いて、寛保元年（一七四一）には、人形浄瑠璃の『播州皿屋舗』（為永太郎兵衛、浅田一鳥作。以下、浄瑠璃『皿屋舗』と略称する）が上演され、これが、その後の舞台芸能における「皿屋敷もの」の基盤となる。浄瑠璃『皿屋舗』は、細川・山名氏の対立する室町時代に世界を定め、播州細川家の御家騒動を基軸とする仇討ち譚として構成されている。悪臣・青山鉄山と弟忠太は、御家乗っ取りの奸計をお菊に聞かれてしまったため、皿紛失の濡れ衣を着せてお菊を惨殺し井戸へ投げ込む。その後、お菊の夫・船瀬三平らが、鉄山と忠太を追い詰め仇を討つ、という筋立てである。

江戸時代における歌舞伎の「皿屋敷もの」は、ほとんどが、この浄瑠璃を元にした〈播州〉型を基盤としている八。中でも、『実成金菊月』（嘉永三年（一八五〇）、中村座。以下、『実成』と略称する）は、初演時に大当たりを取り、後に、二代目河竹新七が大詰を加筆した『皿屋敷化粧姿視』（以下、『化粧』と略称する）として、文久三年（一八六三）に再演された。その後も繰り返し上演され、現在「播州皿屋敷」として上演されるものの基盤となっている九。浄瑠璃『皿屋舗』と筋立てや登場人物に相違はあるが、青山・お菊の人物設定や、室町時代における播州細川家の御家騒動という枠組みは共通する一〇。

一方、〈番町〉型として作品化された代表的なものは、先述した馬場文耕の『弁疑録』である。これは、江戸番町に伝わる古伝承を下敷きに、天樹院（出家した千姫）の屋敷――吉田御殿内にあった井戸の因縁にまつわる怪異譚として構成されている。天樹院は、通りすがりの男性を屋敷に引き入れては寵愛し、飽きると殺して井戸に捨てていた。時を経て、その屋敷跡

に、火付盗賊改の青山主膳が住まうことになるが、あるとき、家宝の皿欠損を理由に、奥方ともども下女のお菊を折檻し、自死に追いやる。お菊の幽霊は青山一家に祟り、夜な夜な皿を数えて人々を怖がらせるが、了誉上人（三日月上人）の法力によって成仏する。怪異譚でありつつ、最終的には了誉上人を讃える高僧伝の体裁が取られている[二]。『弁疑録』以降、明治二十年ごろまでに、『今古実録 怪談皿屋敷實記』（明治十六年、栄泉堂）・『実説怪談皿屋敷』（明治十八年、時習堂）など、複数の実録類が相次いで刊行される[三]が、総じて、皿を欠損した罰として折檻を受け自害したお菊の幽霊が、了誉上人によって成仏を遂げる、という共通した筋書きを持っている。久米平内の逸話や眉間尺の逸話が加わるなど、『弁疑録』よりも詳細化・具体化しているが、それらの筋立てが『弁疑録』を下敷きにしていることは明白である。

このように、江戸時代中期～明治初年にかけて、浄瑠璃・歌舞伎といった舞台芸能作品においては〈播州〉型が、実録・講談類においては〈番町〉型が、それぞれ踏襲されてきたことが分かる。

2，『小説番町皿屋舗』の梗概

以上のような「皿屋敷もの」の系譜をふまえた上で、伯円『小説』の内容をみていきたい。

『小説』は、明治二十三年三月から二十四年二月にかけて、速記雑誌『百花園』に全二十六席に亘って連載された、長編講談速記である[三]。「伯円が二十年前に十八番の読物に至しました講談」（第一席）とあるので、成立年は少なくとも、明治三年以前ということになる。なお、本作については、吉沢英明『講談明治期速記本集覧 付落語・浪花節』に書誌事項、同『講談作品事典 下』「番町皿屋敷」の項に、冒頭部分への言及がある。

以下、少々長くなるが、梗概を示す。通し番号と見出しは内容のまとまりごとに私に付し、（）内に雑誌記載の席数を示した。ただし、雑誌では途中で席数表記にずれが生じているため、ずれのある箇所は適宜、通算席数を注記することとする。

①千姫と坂崎出羽守（第一席）

番町皿屋敷伝承の発端として、牛込見附内・吉田御殿の来歴――千姫の逸話から語り起こされる。慶長二十年の大坂落城時、坂崎出羽守が家康の命によって、秀頼の正室であった家康の孫・千姫を救出する。救出できれば妻にやるという約

束だったが、当の千姫が坂崎の妻となることを拒否した。坂崎は激怒し承服しなかったため、理不尽の内に斬られた。

②千姫の再縁、吉田屋敷への転居（第二席）

千姫はその後、播州姫路城主・本多忠知（忠刻か）と再縁するが、若くして死別。その後剃髪して天樹院となり、件の吉田御殿へと移る。若く美しい男性が通る度に、御殿の二階から手招きをしては、御殿内に引き入れているという噂。ある日、小間物屋の与吉という男が通りかかり、御殿に引き入れられた。

③与吉の危機と御殿からの脱出、大久保彦左衛門による庇護（第三～七席）

御殿内に入った与吉は、当初こそ贅沢な暮らしを満喫していたが、あるとき、御殿内の古井戸に多くの死骸が投げ込まれているのを見てしまう。恐れおののく与吉だが、天樹院の寵愛を受けていたため咎めなく屋敷外に出される。その後、大久保彦左衛門が偶然与吉に出会い、子細を聞いたことがきっかけで、吉田御殿の実態が発覚する。（なお、ここで、与吉は後の三日月上人であることが補記されている。）

④遠山茂之丞と竹尾の事件（第八・九席）

用人・遠山茂之丞が天樹院の気に入りとなり寵愛をうけるが、天樹院の腰元である竹尾と良い仲になる。茂之丞から竹尾に宛てた艶書が天樹院の知るところとなり、二人は懲罰を受ける。茂之丞は殺され、竹尾は自ら井戸へ身を投げた。その後天樹院も病死。墓所は、下総の弘経寺に作られた。

⑤吉田御殿のその後、青山主膳の来歴（第十・十一席）

吉田御殿は荒れ果て、夜な夜な幽霊が出るという噂、誰も寄り付かなくなった。十年後、旗本奴の青山主膳が吉田御殿に住まうことになった。主膳は火付盗賊改で、豪邁快活。夫人に死に別れてから後妻も取らず妾も作らずにいた。ある日、暇を持て余した旗本たちは、主膳の屋敷で、真夏に冬の装束・調度を用いて熱いものを食べる、我慢会を開催する。

⑥お菊の来歴

（第十二・十三席、第十四席目〈雑誌の表記は「第十三席」〉）

主膳の屋敷で下女奉公をしているのがお菊。お菊の父は香坂甚内という盗賊で、火付盗賊改である青山主膳によって捕縛された。甚内にはお菊・お結という二人の娘がおり、姉・

お菊は甚内の若党であった小島三平と夫婦になり、重松という子どもがいる。甚内の捕縛・獄門に伴い、お菊は夫がいることを隠して青山家へ奴奉公にあがることとなる。妹・お結は奴遊女として吉原へ遣られ、大淀太夫となる。お菊の夫・三平は、植木売りとして重松を育てている。

⑦主膳と忠太夫からの口説き、皿欠損の濡れ衣

（第十五・十六席目〈雑誌の表記は「第十四席」「第十五席」〉）

主膳はお菊を気に入り、口説く。お菊は夫と子どものいる身であることを打ち明け断るが、主膳は、自分の妾となれば夫三平と重松は出世させる、そうでなければ夫と子どもを死罪にするがどうだ、と迫る。お菊が決められず寝間に下がり思案していると、用人の相川忠太夫がやってきて、自分と一緒に主家の金を取って逃げて夫婦になれば、主膳の求愛から逃れられると迫る。お菊が断ると、捕縛して主膳の元へ連れていき、他の女中の罪をお菊に着せて、「お菊が家宝の皿を割った」と虚偽の報告をする。

⑧お菊殺し（第十七・十八席目〈雑誌の表記は「第十六席」「第十七席」〉）

忠太夫の報告を聞いた主膳は、恋の遺恨も相俟って、怒りを爆発させる。まだお菊に未練のある主膳は、今自分の意に従えば、命は助けてやるがどうだと迫る。しかしお菊は、頑として拒否。主膳はお菊を斬殺し、忠太夫にもとどめを刺させ、亡骸を井戸へ放り込んだ。

⑨忠太夫の吉原行き、お菊妹・大淀との出会い

（第十九・二十席目〈雑誌の表記は「第十八席」「第十九席」〉）

眠れない忠太夫は、籠を呼び吉原へ。お菊の妹であるとも知らず、三浦屋の大淀を呼ぶことになる。待っている間に眠ってしまった忠太夫は、「お菊、許してくれ」とうわごとをいう。それを聞いた大淀は、姉の身になにかあったのではと疑う。夜が明けて、忠太夫の身元を聞いた大淀は、その疑いを確信へと変える。

⑩お菊夫・三平、一子・重松、お菊の幽霊との邂逅

（第二十一・二十二席目〈雑誌の表記は「第二十席」「第十九席」〉）

下総国葛飾郡寺島村では、お菊の夫・小島三平と一子重松が暮らしている。ある夜、戸を叩く音がして、お菊の声が聞こえた。外に出て周囲を探すが、誰もいない。家に戻ってみると、重松が「今おっかさんが来て、番町のお屋敷で殺された

と言った」という。驚いて番町へ向かった三平は、蕎麦屋で出会った按摩から、偶然、お菊の死の顛末を聞くことになる。

⑪三平・大淀、お菊の死を確信する

（第二十三・二十四席目〈雑誌の表記は「第二十一席」「第二十二席」〉）

按摩から顛末を聞いた三平は、その足で吉原の大淀のところへ行く。大淀と三平が対面し、どうにかして仇討ちをしたいと思案していると、隣の部屋から、大淀の馴染み客である兵藤（粂）平内が声を掛けた。

⑫主膳・忠太夫の処罰

（第二十五・二十六席目〈雑誌の表記は「第二十一席」「第二十四席」〉）

（冒頭で平内の来歴が語られる）平内の助太刀を得た三平・大淀は、まず大淀の文によって忠太夫を吉原へ呼び出し、道中にて三平が駕籠を襲って生け捕り、南町奉行・村越長門守の屋敷まで連れて行く。そこで吟味が行われ、相川は投獄。主膳は吟味の末、閉門後、小普請入の旗本へ降格。その後再婚し子どもも生まれるが、なおお菊の幽霊に悩まされ、最後は隣家へ切り込んで狂死した。

以上のように『小説』は、江戸時代前期の、番町吉田御殿を舞台とする皿屋敷譚である。天樹院の因縁から語り起こされる点や、火付盗賊改という青山の肩書き、お菊の来歴と身分などは、確かに〈番町〉型を基盤としており、『弁疑録』の系譜上に位置するものと、ひとまずは把握される。

3，『小説』と『弁疑録』との相違点

しかしながら、登場人物の細かな設定や、後半の筋立て（梗概⑨以降）には、『弁疑録』とは大きな異なりがある。以下、『小説』の設定や筋立てにおいて『弁疑録』とは異なっている部分を、対比的に示す。

A、お菊の家族設定

『弁疑録』では、盗賊・高坂甚内の娘とのみ記されるが、『小説』では、甚内の若党を夫としており、二人の間には息子もいる。夫の名は「小島三平」、息子は「重松」。

B、お菊の妹

『弁疑録』では、お菊の兄弟姉妹への言及はないが、『小説』では、お結という妹がいて、父・甚内の処刑後、奴遊女とし

て吉原へ出され、「大淀」という太夫になっている。

C、青山の家族設定

『弁疑録』では懐妊中の妻がいる（後に子どもが生まれる）が、『小説』では三年前に妻に死別し、今は独り身である。

D、青山からお菊への感情

『弁疑録』では、青山は特にお菊への恋愛感情を持っておらず、青山の妻が勝手に関係を疑い嫉妬しているだけだが、『小説』では、青山はお菊に恋慕・執心し、執拗に口説く。

E、皿欠損の理由

『弁疑録』では、お菊は自らの過失により皿を割ってしまう[一四]が、『小説』では、用人・相川忠太夫の口説きに応じなかった腹いせに、他の女中が皿を割った濡れ衣を着せられる。

F、お菊の死の理由

『弁疑録』では、お菊は皿欠損の罪で折檻・指を切られるなどの仕置きを受ける。監禁場所から這い出し、青山夫妻に祟りをなすことを誓って自ら井戸へ身投げする。『小説』では、皿欠損の罪および、叶わぬ恋の意趣返しに、青山および忠太夫によって斬殺され、井戸へ投げ込まれる。

G、青山への報復

『弁疑録』では、お菊の幽霊が行く先々に現れたり、生まれた子どもの指が欠損していたりと、お菊の祟りが次々と襲いかかり、夫婦は離散に追い込まれる。『小説』では、お菊の幽霊は出るものの、青山・忠太夫を直接的に追い詰めるのは、お菊の夫・三平と、妹・お結（大淀）、そして助太刀となった兵藤平内である。三人によって裁きに掛けられた忠太夫は獄門、青山はお役剥奪・無官となり、最後は狂死する。

H、お菊の成仏

『弁疑録』では、皿欠損によって成仏できないお菊の幽霊は夜な夜な井戸から現れて皿を数えるが、了誉上人（三日月上人）の法力・機転によって成仏が叶う。『小説』では、三平・お結による仇討ち後も、お菊の幽霊は青山に付きまとう。皿欠損への未練もみられず、皿数えの趣向もない。了誉上人は登場せず、お菊が成仏したという明確な記述もない。

このように、お菊の家族構成および、皿欠損以降の展開において、『小説』と『弁疑録』には大きな相違がある。

4，『小説』と〈播州〉型「皿屋敷」との共通点

『小説』における、こうした『弁疑録』との相違部分は、実は、〈播州〉型「皿屋敷」との共通点である。

『小説』と〈播州〉型との最も大きな共通項は、お菊に夫が居て、その夫が仇討ちを敢行するという点である（A・G）。夫による仇討ちは、浄瑠璃『皿屋舗』および『実成』に共通する枠組みである。加えて、播州に残る実録類でも、お菊の夫（許嫁）が仇討ちに奔走する筋立てになっており（実録類の梗概については後に詳述する）一五、お菊の夫による仇討ちという展開は、芸能のみならず、広く〈播州〉型のスタンダードであったと思しい。なお、『小説』におけるお菊の夫の名「小島三平」は、浄瑠璃『皿屋舗』および『実成』における夫の名「船瀬三平」が意識されたものではなかろうか。

次に挙げられる共通項は、皿欠損の理由とお菊の死の原因である（E・F）。『弁疑録』と『小説』との決定的な違いは、お菊が皿を自らの過失で割るか、濡れ衣を着せられるかであるが、「皿紛失の濡れ衣を着せられる」のも、〈播州〉型に共通する枠組みである。浄瑠璃『皿屋舗』と『実成』では、御家乗っ取りの奸計をお菊に知られた青山が、わざと皿を一枚隠し、皿紛失の罪を着せて殺す。播州の実録類でも、青山の家来がお菊に皿紛失の濡れ衣を着せて、折檻の上斬殺する。『小説』は明らかに〈播州〉型を取り入れている。

このように、時代・舞台と人物設定の面では『弁疑録』を下敷きにしながらも、「皿欠損の濡れ衣と陥れ」「お菊の夫による仇討ち」という〈播州〉型の展開を積極的に取り込み、〈番町〉型と〈播州〉型の融合した話型を構築している点に、『小説』の最大の特徴があるといえる。

4―1、『実成金菊月』からの影響

中でも直接的な影響をみておくべきなのは、歌舞伎の『実成』とその改作『化粧』である（以下『実成』で代表させる）。同じ〈播州〉型でも、浄瑠璃『皿屋舗』と『実成』には少なからぬ相違点があり、『小説』に直接影響を与えたのは『実成』ではないかと考えられる。以下、浄瑠璃『皿屋舗』にはみえず、『実成』と『小説』とに共通する点を整理し、両者の関係を明確にしたい。

(1)一子の存在と三平の職業

まず初めに挙げられる共通項は、お菊・三平夫婦に子どもがいること、夫・三平が武蔵国で植木屋に身をやつしながらその一子を育てているという点である。これは、管見の限り、〈播州〉型の諸作品の中でも、『実成』のみにみられる設定である。浄瑠璃『播州』にもお菊の夫（船瀬三平）は登場するが、二人の間に子どもがいるという記述はみられない。

『小説』では、夫・三平と一子について、次のようにある。

（お菊の父・香坂甚内の言葉）

責めて我血統を後へ残さんと思ひ、三平とお菊を夫婦にして、其頃葛飾郡寺島村（目下の向島）辺へ僅かな田地を買て之を授けました。三平と菊は親が許す夫婦となり二人が中へ一子を生じ、嗜（すき）な道とて植樹其他草花抔（など）を培養致まして…（後略）　（第十三席）

寺島の里に残りました小島三平、（中略）重松と云ふ幼児を男の手一ツで養育致して、此重松を肌に背負ひ植樹の駕籠を擔（かつ）ぎまして…（後略）

（第十四席目〈雑誌の表記は「第十三席」〉）

お菊は、父・甚内の若党であった小島三平と夫婦になり、一子・重松をもうけ、武蔵国葛飾郡寺島村にて植木屋を営んでいた。お菊が青山の屋敷へ奴奉公に出てからは、三平が一人で重松を育てながら、植木屋稼業を続けている。

『実成』でも、お菊の夫・船瀬三平は武蔵国にて植木屋として生計を立てていることが、次のように示される。

（三平の家来・下部繁平の言葉）

長のお暇給わりし拙者が古主船瀬三平。二君に仕へぬ侍わざ、只今にては浪々の活計（たつき）にせまる土民の境涯。たしか武蔵の葛飾にて、わづかな植木を渡世の様子。

（三建目「播州細川家浜館の場」）

さらに、六建目「寺嶋村植木屋の場」は、まさにその武蔵国寺嶋村を舞台とした場面で、そこに住まう「植木屋十作実は船瀬三平」と、「十作一子十松」がお菊の死の真相を知り、仇討ちへ向かう経緯が描かれる。お菊夫婦に子どもがいること、夫が植木屋に身をやつすという具体的な設定、および武蔵国寺島（嶋）村という居住地が一致していることから、『小説』が『実成』の設定をそのまま用いていることが明白である。なお、『実

成』六建目「同幽霊子別の場」では、三平・十松（とお菊の父・佐次太夫）がお菊の幽霊と邂逅する場面が描かれるが、同様の場面は『小説』にも登場する（第二十一・二十二席目〈雑誌の表記は「第二十席」「第十九席」〉）。ここにも『実成』からの影響が指摘できる。『小説』では子どもの名前が「重松」で、『実成』の「十松」と近似している点も留意されよう。

(2)お菊殺害の理由

二点目の共通項は、青山がお菊へ恋心を抱いており、それが叶わなかった恨みが、皿欠損と相俟ってお菊殺害の理由になる点である。『小説』において主膳は、周囲の薦めもあって、次のようにお菊に迫る。

> 此主膳真から底から其方に恋着致した。臍緒を切て初めて女子（にょし）に惚れたんで有るに依て、其方に於ても豈夫（よもや）否やを申すまいから、今宵を初め主膳の寝間の伽を致せ…
>
> （第十五席目〈雑誌の表記は「第十四席」〉）

主膳は三年前に妻に死別しているが、お菊に会って生まれて初めて女性に恋をしたと明かし、自分の意に従うよう迫る。しかしお菊が、夫も子もある身であることを理由に主膳の申し出を断ると、次のように言う。

> 此主膳、生れて初めて婦人（をんな）の色香に迷ひ、即ち是が終りの初物。其方（そち）の為めに嫌はれて恋の叶はぬ遺恨と家の重器を破壊致した二ツの罪が一ツに成て、残念ながら其美しい其方も空しく古井の苔と致して仕舞はねばならぬ…
>
> （第十七席目〈雑誌の表記は「第十六席」〉）

意に沿わないのであれば、恋の叶わぬ遺恨と、家宝の皿を破損した罪によって成敗すると脅す。主膳はぎりぎりまで、「我が意に従えば命は取らない」と迫るが、お菊は頑として受け入れない。そのため憎さ百倍となり、最後には惨殺に及ぶのである。

『実成』のお菊殺害もまた、明確に、青山の「叶わぬ恋の意趣返し」が理由のひとつとなっている。もちろん、皿紛失の過失を捏ち上げて無実の罪を着せるのは、御家乗っ取りの謀略を知られたためというのが大きな理由ではあるのだが、そこに「恋の叶わぬ遺恨」を絡めるのは、浄瑠璃『皿屋舗』にはない趣向である。

『実成』において、皿紛失の責めを受けるお菊に対し、青山

は次のように言う。

団[鉄山]　どふだ苦しいか。「人我に辛ければ、我また人に辛し」の譬へ　○　数へてみれば早五ツ年。われが心に覚が有ふ　○　まだ其方が奥方に宮仕へにて有りし頃　○　恥しながらぞつこん執心　○　折待つ宵の月の宴、くどけどいつかな聞訳なく　○　われに見かへて三平に乳繰り合つたも奥方が情によつて夫婦の堅め　○　小胸が悪い　○　浪々のその内に子中なしたと聞につけ、思ひ絶へても心の煩悩。

小団[お菊]　そんなら恋の叶わぬを根にもつて　○　私に憂目を見せるのじやな。

団[鉄山]　ヤアおろか〳〵　○　大望抱くこの鉄山、成り下りの下素女郎にさまで心を苦しめんや　○　なれども一旦執心の思ひを遂ぐるも武士の意地　○　口外なしたる刀の手前　夫ト三平は言ふに及ばず、親佐次太夫も今に寂滅　○　それともに　○　三平を振りすて身が心に従へば、科を許して今日より、栄耀栄花は身の仕合、色よい返事は、どふだ〳〵。

（五建目「浅山鉄山下屋敷の場」）

責め場では、青山は妻が生きていた頃からお菊に執心していたことが明かされ、お菊が自分に靡かないことへの嫉妬心が、皿紛失に対する責めを苛烈なものにしていることが描かれる。「三平を振りすて身が心に従へば、科を許して今日より、栄耀栄花は身の仕合、色よい返事は、どふだ〳〵」と、我が意に従えば罪を許すと迫る点も、『小説』と共通する。

浄瑠璃『播州』では、青山がお菊を殺害するのは、御家乗っ取りの計画を知った下郎を殺したところを、お菊に見られてしまったことが原因である。鉄山は、お菊の口封じをするため、わざと自ら皿を一枚隠し、お菊に罪を着せて殺すのであり、青山がお菊に懸想したというような設定は全くみられない一六。

以上のように、『小説』には『実成』との共通項が数多く見出される。『小説』創作においては〈播州〉型「皿屋敷」――就中、『実成』に代表される歌舞伎の「皿屋敷」が参照されていたことがうかがわれる。すでに越智治雄が『小説』について、「お菊に夫三平がおり、その間に子が生まれているという設定は、明らかに浄瑠璃、歌舞伎劇からきている」と指摘するところである一七が、その他にも、特に『実成』から摂取された点は少なくないといえる。

実際、『小説』には、歌舞伎との関係について次のような引

きごとがみえる。

皿屋敷の井戸の場は劇場（しばゐ）ではいつも呼場で御座います。甚だ時代な事を申すやうでは御座いますが、拙者抔（てまいなど）の若い時に市川小団治（先代の高島屋）が一丁目中村座の秋狂言に皿屋敷を演じました。其時は青山主膳、事劇場では青山鉄山、是は八代目団十郎の役で御座いました。此井戸の場は出物止めに相成りました。是が為に凡八十日ほど大入大繁昌を致した事を眼に染みて居ります。其後明治に相成りまして、新富座の夜劇場で、現時（たいじ）の菊五郎がお菊に扮し団洲翁が鉄山で、是も又非常の喝采を得ました。

（第十七席目〈雑誌の表記は「第十六席」〉）

伯円が若い時に観たという「中村座の秋狂言」は、嘉永三年（一八五〇）九月八日より中村座で掛かった、他ならぬ『実成金菊月』であるとみてよい。お菊を演じたのは、後に伯円と親交を深めることになる四代目市川小団次で、『歌舞伎年代記　続編』には「五立目。（中略）直に幽霊になり鉄山悩す処大出来」「六立目。十作内お菊の怪談大出来」と絶賛されている[一八]。また、「新富座の夜劇場」は、明治十一年八月九日から九月十五日まで行われた、新富座の「舞台明治世夜劇」であろう。お菊は五代目菊五郎、鉄山は九代目団十郎であった[一九]。絵役番附に「播州皿屋鋪」とあり、「浅山邸の場」「三平内の場」に加えて「関口水車の場」の記載がみえる[二〇]ことから、この「皿屋敷」は、『実成』に黙阿弥が大団円の結末を追加した『化粧』であったと考えてよい。伯円の脳裏には、こうした歌舞伎における「皿屋敷」が印象づけられていたことが推測される。『小説』に『実成』との共通項が見いだされる背景には、こうした観劇経験と「皿屋敷もの」への知識・理解があったものと思われる。

加えて、講談を歌舞伎の「実説」として仕立てる意図もあったのではないかと考えられる。先の引用箇所の続きには、次のようにある。

いづれも残酷な殺し場に愁歎が有まして、是には義太夫が這入り道具建と云ひ余程面白く雅俗共に歓びます処で有ますが、如何にせん講談は箇様な所は格別看客をして歓ばせると云ふ訳には決して往きません。依て此井戸の所は極淡泊に述べて置きまして、其余の所に甘味有るやうに注意致しませう。看客諸君其お積りで御一読願ひます。

聴き手（読み手）が歌舞伎の「皿屋敷」に親しんでいるという前提のもと、対比的に講談を読み進めていることが分かる。また、第十六席目（雑誌の表記は「第十五席」）において相川忠太夫がお菊に言い寄る場面では、「劇場（しばゐ）なれば二枚目仇き到底出来ない相談では有ますが」という引きごとが入り、歌舞伎における青山の家臣・忠太と、忠太夫とを比較するかたちで物語を進行している。

このように、歌舞伎の筋立てや趣向を踏まえつつ、その「実説」として、「あのよく知られた皿屋敷の顛末や登場人物は、実はこうだった」という角度から、講談「皿屋敷」を書く意図のあったことがうかがえる。もっとも、題目が「実説」ではなく「小説」とされていることには注意が必要で、冒頭には「其のお話の事実を取調べまして発端から申上げるので御座います」（第一席）とある一方、末尾は「小説と実録とを一緒に致した此の長譚も今日で結局で御座います」（第二十六席目〈雑誌の表記は「第二十四席」〉）と締め括られている。いずれにしても、「皿屋敷」というよく知られた演目を掛けるにあたっては、聴き手が必ず想起するであろう歌舞伎の「皿屋敷もの」をふまえることは、必要不可欠であったのだろう。

4―2，実録とのかかわり

一方、『小説』には、浄瑠璃『播州』にも『実成』にもみられない特徴がある。

(1)お菊の妹・大淀による仇討ち

梗概で述べたように、『小説』では、お菊には妹・お結がおり、奴遊女として吉原に遣られ、「大淀太夫」となっている。その大淀が、お菊の夫・三平とともに、忠太夫と主膳を訴え出る一計を案じ、姉の仇討ちを成し遂げる。「お菊妹による仇討ち」という展開は、浄瑠璃『皿屋舗』や『実成』にはみえないものである。『実成』にも、お菊の妹（おみね）は登場するが、おみねは三平の弟と夫婦となり、旧君・巴之介・花園姫夫婦の身替わりとなって果てる役回りで、仇討ちには関わらない[二]。

(2)青山の家来・相川忠太夫による執心と讒言

『小説』に登場する「相川忠太夫」という悪臣は、それまでの作品にはみえない。「忠太夫」という名前は、『実成』に登場する鉄山の家来「浅山忠太」および、『化粧』に登場する「岩淵忠太」に依ったものであると考えられ、その人物をふまえて造型されていることは疑いないが、物語における役回り・重要性は大きく異なる。確かに、『実成』の忠太は、青山とも

に御家乗っ取りの悪計を企み、お菊折檻と殺害にも深く関わる人物ではあるが、あくまでお菊殺しの主体は鉄山であり、忠太は鉄山を手伝う家来に過ぎない。それに対して『小説』の相川忠太夫は、お菊の弱みにつけ込み言い寄るばかりか、腕づくでものにしようと迫り、それでも拒否されると、皿欠損の罪をかぶせて、青山に讒言する。何も知らない青山は、忠太夫の言を信じてお菊殺害に及ぶ。残虐な殺しを行ったのは青山であるものの、姑息な手段でその要因を作ったのは忠太夫である。そのため、幽霊となったお菊が真っ先に祟る対象となっている（第十八・十九席目〈雑誌の表記は「第十七席」「第十八席」〉）。

これら二点の特徴は、播州に残る実録類三にみえるものである。実録類に共通する梗概を示す。

1，播州姫路城主・小寺則元（職）に仕える悪臣・青山鉄山は、御家乗っ取りを企み、則元らを姫路城から追い出した。

2，お菊は青山家で下女として仕えているが、青山の奸計を姫路へ伝えている。お菊には、小寺家の家臣・衣笠靫負（介）という夫（許嫁）がいる。また、室津で遊女の身となっている、花鳥・花月という二人の妹がいる。

3，青山の家臣・町坪弾四郎は、かねてよりお菊に想いを掛けていたが、お菊が靡かないことに腹を立て、十枚揃えの具足の皿を一枚隠し、お菊にその罪を着せる。

4，弾四郎は鉄山に、菊が小寺と内通していることを密告し、「皿を紛失した」と虚偽の報告をする。それを聞いた鉄山は、弾四郎に命じ、お菊に責めを加えて殺害させた。

5，お菊の夫・衣笠靫負は、お菊の幽霊に逢い、事の一部始終を知る。

6，小寺家の家臣らは、青山を攻め姫路城を奪還する。青山は打首となり、弾四郎も隠していた皿を揃えて降参する。

7，お菊の妹花鳥・花月は、姉の仇討ちを申し出る。お菊の幽霊および小寺家臣の助太刀もあり、二人は無事に、町坪弾四郎を討ち果たす。

実録類には、お菊の妹二人（花鳥・花月）が、室津の遊女の身になりつつも、姉の仇討ちを敢行するという筋立てがみえる（7）。「妹が遊女になり、後に仇討ちに関わる」という共通項は看過できず、『小説』創作上、何らかの形で参照された可能性が考えられる。

また、青山の家臣・町坪弾四郎は、お菊に横恋慕した挙げ句、靡かなかった腹いせとして、わざと皿を隠してお菊に罪を着

せる。

町坪弾四郎取持に参候処、つね〳〵く女に目をかけ、女房にせんと千束の文、出入の節いろ〳〵せども、小五郎と契約なればがてんせず。（中略）弾四郎悪心ゆへ、工ミのほどおそろしく、此振舞の折、皿一ツ、町坪ぬすミ置…

（「播州皿屋鋪并入梅松」『播陽万宝知恵袋 下』）

青山はその讒言を信じてお菊を手に掛けるのであり、お菊の死のきっかけを作ったのは、弾四郎である。『小説』に登場する相川忠太夫の造型は、実録類に登場する青山の悪臣「町坪弾四郎」との近似を色濃く感じさせる。

播州で作られた実録類は、版本として刊行されておらず、どこまで広く認知されていたか定かではない。また、伯円が実録類を参照したという確たる証拠もなく、これらの相似点を以て、実録類からの直接的な影響を考えるのは早計であろう。ただ、関西ではある程度知られた話であったらしく、明治三十九年に大阪の松島八千代座で上演された『実録皿屋敷』や、『神戸又新日報』に連載の後、大正二年に刊行された芳尾生『新説怪談皿屋敷』は、播州の実録物に依った設定・筋立てである。この点については、引き続き調査をすすめたい。

5，後世への影響

ここまでみてきたように、伯円『小説』は、『弁疑録』によって形成された〈番町〉型の「皿屋敷」を基盤としつつ、〈播州〉型である歌舞伎『実成』『化粧』の展開を織り込み、さらには播州の実録類にみえる特徴も加味しながら、独自の「皿屋敷」を確立した。こうした独自の筋立ては、明治～大正期の講談に引き継がれる。吉田屋敷の来歴→忠太夫による濡れ衣と讒言→青山と忠太夫によるお菊殺し→お菊夫・妹による仇討ち、という『小説』と同様の筋立てを持つ講談には、現在確認できただけでも、以下のものがある。

・明治三十五年『吉田御殿鹿の子振袖』[二三]
（式亭三馬口演、中川玉・吉田至出版）
・明治三十五年『怪談皿屋敷』[二四]
（式亭三馬口演、中川玉出版）
・明治四十年「実説皿屋敷」
（猫遊軒伯知、『文芸倶楽部』第十三巻十四号）
・明治四十三年『実説怪談百物語』（桃川如燕口演、国華堂）

・大正三年「おきく三平皿屋敷後日譚」
（猫遊軒伯知『文芸倶楽部』第二十巻第十四号）
・大正七年「実説番町皿屋敷」
（猫遊軒伯知講演、浪上義三郎速記、『娯楽世界』第六巻第六号）
・大正十一年『実説怪談　番町皿屋敷』
（悟道軒円玉講演、博文館）

同時期には、『番町皿屋敷』（放牛舎桃湖口演・転々堂吟竹速記、博盛堂、明治三十一年）のように、『弁疑録』と同様の筋立てによるものもあることはあるが、伯円『小説』が、伯知・円玉ら弟子の口演・筆記を通じて広まり、その後の講談「皿屋敷」の話型に少なからぬ影響を与えたことは疑いない[二五]。

さらに注目しておきたいのは、『小説』は、歌舞伎にも脚色されていることである。『百花園』への連載終了からわずか四ヶ月後に、『小説』発端部分を舞台化した『吉田御殿招振袖』が、江戸寿座で上演されている。辻番付には「松林伯円翁が得意の読物、彼の皿屋舗の発端を歌舞伎に脚色（しく）みし狂言（後略）」「百花園の筆記を其儘」とあり、伯円の速記を原作としていることが明記されている[二六]。

続いて、明治二十八年六月には、東京演伎座で『怪談実説皿屋敷』が上演されている[二七]。『読売新聞』の劇評に「今回の書卸にて従来のお菊の怪談とハ少し趣き替れり。是れハ伯円の講談を芝居に遷したるが如し」とする通り、こちらは『小説』全編がそのまま歌舞伎化されたものである[二八]。『続々歌舞伎年代記』には、役名として「青山主膳」「小島三平実は植木屋三平」「相川忠太夫」「三平女房おきく実は腰元おきく」「遊女大淀」などの記載が見え、梗概は先述の『読売新聞』劇評に、三回に亘って掲載されている[二九]。概ね『小説』の筋立て通りだが、忠太夫・青山に対してお上の裁きを恃むという『小説』の結末とは異なり、平内・三平・大淀が相川忠太夫に対峙し、真っ向から仇討勝負を申し込むところで切れ場となっている。

もっとも、当該作は、前掲『読売新聞』の劇評では次のように酷評されている。

芝居の虚大が一般人の脳髄に満々たれバ之を目的に講談師が、芝居で為るお菊彼れハ虚誕なり、実ハ斯々個様〳〵と、お月様の大きさハ団子位が本統なりと云ふ様に叩き立つれバこそ、双方相待つて面白きに、此の反対に立てる講談をその儘演劇の舞台に登すの事あらんか。是れ恰も敵を

迎へて客に請すると均しく、見て其の恐るべく不愉快なるは当然の道理なり。

観客が芝居を熟知した上で、その芝居の虚誕を講談師が言い立てていくのは面白いが、その逆は、まるで敵を客として迎えている（これは、いわば芝居の種明かしとでもいうべき「実説」たる講談を、逆に芝居に持ち込むことをいうか）ようで、不愉快であるという。

この『怪談実説皿屋敷』は、明治四十一年に同じく演伎座で再演された記録がみえる[三〇]が、演目として定着をみることはなかったようである。同時代、「皿屋敷もの」の新作としては、明治十六年に『新皿屋舗月雨暈』（河竹黙阿弥、東京市村座初演）、大正五年に『番町皿屋敷』（岡本綺堂、東京本郷座初演）が上演された。これらは、江戸時代以来の伝統的な皿屋敷狂言であった『化粧』と平行し、近代における新たな「皿屋敷もの」の代表となっていく。『新皿屋舗月雨暈』は、元々は、責め場・殺し場・幽霊といった旧来の「皿屋敷もの」の趣向をふまえた作品であるが、そこよりも、妹を殺された兄が酒乱となる二幕目（いわゆる「魚屋宗五郎」）が好評となった。また、岡本綺堂の『番町皿屋敷』は、青山とお菊を相思相愛の設定に仕組んだ悲恋物語として人気を博した。旧来の怪談を時代遅れとみる意識と相俟って、新たな世話物が求められた結果であろう。

そのような動向の中にあって、『小説』の歌舞伎化は、決して評判の芳しいものだったとは言い難いが、『小説』型の筋立てが、その後、映画等の他メディアに展開する素地になったのではないかと考えられる。神戸映画資料館が所有するフィルム「怪談皿屋敷［仮題］」の字幕には、「忠太夫」「遊女大淀」「お縫」（筆者注：お結に同じか）とみえ、お菊殺しの場面と、忠太夫が吉原へ出向いて大淀と出逢う場面、お菊の霊にうなされる場面が描かれている。断片的ながら、『小説』の話型がふまえられていることが分かる。これは、大正五年公開の「お菊虫」（天活）の一部ではないかとされている[三一]が、その概略である「怪談於菊虫」（桂田阿彌笠、『文芸倶楽部』第二十二巻八号）は、所々独自性はあるものの、吉田御殿の来歴→青山主膳と相川忠太夫によるお菊殺し→お菊夫と妹・大淀による仇討ちという、『小説』の筋立てを基盤としている。

また、昭和四年公開の『異説番町皿屋敷』（河合映画製作社、丘虹二監督、三村伸太郎原作・脚色）には、「用人相川忠太夫」（演：永井柳太郎）・「おきく妹大淀」（演：鈴木澄子、お菊と二役）が登場する[三二]。『キネマ旬報』「各社近作日本映画紹介」

に記載されたあらすじによれば、青山・お菊を相思相愛の関係とする岡本綺堂型と、妹による仇討ちという結末を持つ伯円『小説』型を合わせたオリジナルストーリーである。同誌「旬報グラヒック」には、お菊手討ち場面の写真とともに、「『異説番町皿屋敷』は新□(欠字)釈に仍るもので、怪談ではなく仇討物である。旗本青山主膳に斬られて、古井戸に落ちて行く、おきくは決して化けないのであります」と解説がある。

大正・昭和期に作られた「皿屋敷もの」の映画全体からすれば、『新皿屋敷月雨暈』(「魚屋宗五郎」)および岡本綺堂『番町皿屋敷』に基づくものが圧倒的多数を占めるが、その中でも、少数ながら、伯円『小説』の話型に依拠した作品が公開されていることは、注目されてしかるべきであろう。当該の話型が、「皿屋敷もの」を形作る要素として享受・継承されていたことを物語る。「相川忠太夫」とお菊妹「大淀」の登場する仇討ち譚としての「皿屋敷」は、明治期以降の講談の中に根付き、さらには、歌舞伎・映画の中にも取り入れられ、講談の枠を越えて波及していったのである。

おわりに

以上本稿では、松林伯円の速記連載『小説番町皿屋舗』の話型の特徴を分析し、本作が、「皿屋敷」伝承および、芸能における「皿屋敷もの」の系譜の中で、どのように位置づけられるのかを考察してきた。『小説』は、先行する馬場文耕の『弁疑録』に依りつつも、歌舞伎『実成』の人物設定や話型を取り込み、また播州の実録類に特徴的な要素も組み込みながら、新たな「皿屋敷」譚を創出したものと位置づけられる。

『小説』の話型は、戦後から現代においても、講談の「皿屋敷」を形作る主要な要素として受け継がれている。昭和三十年に刊行された『番町皿屋敷』(『講談全集』三十八、大日本雄弁会講談社編)は、青山とお菊を相思相愛の設定とし、お菊が青山の心を試すために皿を割るという岡本綺堂型に依りつつも、お菊に横恋慕する相川忠太夫の密告、お菊の夫・三平と妹・大淀による仇討ちといった、『小説』型の展開を持つ。また、昭和四十六年刊行『定本講談名作全集 別巻』(講談社)所収の「皿屋敷」解題(佐野孝執筆)では、『小説』に依拠したあらすじが紹介され、「演者によって多少の相違はあるが、講談の番町皿屋敷というのは怪談と云うよりも、一種異色の世話物と云うべきであろう」と述べられている。

現在口演される「皿屋敷」も、演者による幅はありつつも、『小説』型を基盤とするものが主流を成すようである。瀧口雅

仁『講談事典』収載の「演目・演題」によれば、現行の講談「番町皿屋敷」のあらすじは、吉田屋敷の来歴から始まり、お菊の夫と一子、相川忠太夫の登場する『小説』型である[三三]。公開・販売されている音源を確認しても、要所要所に『小説』型が取り入れられていることが分かる。神田陽子『怪談ものがたり其の四』（テイチクエンタテインメント、二〇〇五年）所収の「番町皿屋敷」では、『小説』の話型に基づき、青山主膳の屋敷場面から、忠太夫の自宅にお菊の亡霊が現れるくだりまでが語られ、忠太夫の獄死と青山の狂死というその後の顛末にも言及されている。一龍齋貞水『江戸怪奇夜話し　第六話　怪談番町皿屋敷』（株式会社 MTR、二〇〇六年）は、お菊殺しの場面までの口演だが、青山に奥方がいて懐妊中であるという『弁疑録』の型を基盤としつつも、お菊に恋慕する用人の相川忠太夫が皿を隠してお菊に罪を着せる『小説』型の展開が織り込まれている。また、旭堂南湖「番町皿屋敷」（『講談古典怪異譚』十六～十八所収、パンローリング、二〇二四年）は、発端から大団円までを収録する完全版であるが、これは、昭和四十二年六月～九月にかけて新聞「新大阪」に連載された、三代目旭堂南陵の連載講談「怪談番町皿屋敷」に基づいて口演されているという[三四]。筋立てとしては、前掲した昭和三十年の『講談全集』所載のものとほぼ一致する。

戦後の映画・テレビドラマにおいても、時代を下るほど、それまでに出された様々な「皿屋敷」の型が融合され、あたかも「詰め合わせ」のごとき様相を呈するようになる。たとえば、テレビ時代劇『怪奇十三夜』（一九七一年、日本テレビ）「番町皿屋敷」では、岡本綺堂型を主軸としつつも、お菊の兄・魚屋の岩吉が登場する点は『新皿屋舗月雨暈』（魚屋宗五郎）が取り入れられている。また、青山の家老が故意に皿を割り、下男下女に申しつけて、「お菊が皿を割ったところを見た」と虚偽の申告をさせるという筋立ては、『小説』型に近い展開である。

講談から歌舞伎へ、歌舞伎から映画へと、他メディアへの移植・書き換えを繰り返す中で、伯円原作というクレジット表記が失われ、それに伴い、『小説』型の話型が、そもそも講談に由来するという認識さえも希薄になっていったと思しい。しかしながら、伯円『小説』によって形成された話型は、明治時代～現代に至る「皿屋敷もの」の系譜において、確固たる位置を占め、少なからぬ影響力を持ち続けてきたということを確認して、本稿の結びとする。調査の不十分な点も多々あることを恐れつつ、ご批正・ご教示を仰ぐ次第である。

【注】

一　小二田誠二「実録体小説の原像―「皿屋舗辨疑録」をめぐって」（『日本文学』三十六巻十二号、一九八七年）

二　横山泰子・飯倉義之・今井秀和・久留島元・鷲羽大介・広坂朋信『皿屋敷　幽霊お菊と皿と井戸』（白澤社、二〇一五年）第一部第二章「播州皿屋敷」「解説『竹叟夜話』について」（広坂朋信氏執筆）。

三　諏訪春雄「皿屋敷流転」（『江戸―その芸能と文学』、毎日新聞社、一九七六年）、横山泰子『江戸東京の怪談文化の成立と変遷』（風間書房、一九九七年）第二章第二節「『彩入御伽草』と皿屋敷」。

四　三田村鳶魚「怪談の皿屋敷」（『三田村鳶魚全集』巻八、中央公論社、一九七五年）。

五　注三諏訪論文によれば、元禄年間に江戸で、皿屋敷伝承にちなんだ歌舞伎が上演されていた（『元正間記』『久夢日記』）が、詳細は不明である。

六　注三諏訪論文。天理図書館蔵の役割番付により紹介されている。

七　土田衛「『歌舞伎年表』補訂考証　享保編其二（享保三～六年）」（『演劇研究会会報』三十一号、二〇〇五年六月）

八　『播州皿屋敷』（万延元年、大坂角の芝居）、『けいせい鏡台山』（文化二年、中村座）、『彩入御伽草』（文化五年、市村座）など。

九　『未翻刻戯曲集 22　実成金菊月』（国立劇場調査養成部、二〇一六年）解題（埋忠美沙氏執筆）。

一〇　ただし、『実成』には、松月尼が二階から手招きして男を引き入れるといった、『弁疑録』にみえる「二階招き」の趣向が取り入れられている。注九解題による。

一一　注一前掲小二田論文、四代目旭堂南陵・堤邦彦編『よみがえる講談の世界　番町皿屋敷』（国書刊行会、二〇〇六年）「解説」（堤邦彦氏執筆）。

一二　注十一『よみがえる講談の世界　番町皿屋敷』巻末所収年表参照。『怪談皿屋舗実記』（銀花堂、明治十八年）、『実説怪談皿屋敷（怪談皿屋敷實傳）』（田中太右衛門・浜本伊三郎、明治十九年）、『怪談皿屋敷実記』（明治二十一年、赤松市太郎）、『怪談皿屋敷実記』（明治二十三年、中礼堂）、『怪談皿屋敷實記』（明治二十六年、駸々堂）など。

一三　『百花園』第二十二号～第三十二号、第三十四号～第四十三号。最終話が「第二十四席」となっているが、実際の席数表記にずれがある。通算では

二十六席。酒井昇造速記。三十七号「第十八席」（通算では十九席目）からは今村次郎速記。

一四 同系統の実録には、猫に驚いて皿を割ってしまうパターンのものもある（『古今実録 怪談皿屋敷』（明治十六年、栄泉社）など）。

一五 実録では、お菊には「衣笠靱負介」（「衣笠靱負」とも）という夫（許嫁）がおり、お菊の二人の妹とともに仇討ちを決行する。

一六 なお、鉄山の弟・忠太がお菊に懸想しているような描写はある（下之巻）。（忠太）「（前略）よふ息才で居てくれた。可愛ひ奴め」と向抱にひったりと締め付けられて、（お菊）「アヽ是なあ暑時分にしたゝるいひ。土仏の様な形していやらしい。何ンじゃいな」と振り放せば、（忠太）「エヽそれはあんまり曲がない。是程おらが心を尽くすに。まだ三平にりんゑが残るか因果め」。

一七 越智治雄『明治大正の劇文学―日本近代戯曲史への試み』（塙書房、一九七一年）六七頁、註四。

一八 石塚豊介子『歌舞伎年代記 続編』巻二十四、嘉永三年条。

一九 田村成義『続々歌舞伎年代記 乾』（市村座、一九二二年）巻の一、文久三年条。

二〇 絵役番付「舞台明治世夜劇（五幕）、里見八犬伝（前譚）、播州皿屋鋪（後譚）」（明治十一年）
早稲田大学演劇博物館 近世芝居番付データベース 登録№ 24-00013-0096
https://archive.waseda.jp/archive/detail.html?arg={%22subDB_id%22:%2279%22,%22id%22:%22436811;1%22}&lang=jp
（二〇二六年一月二十八日最終閲覧）

二一 『実成』以前でいえば、皿屋敷ものの歌舞伎のひとつである『けいせい鏡台山』（文化二年、中村座初演）には、お菊の異母妹・お照が登場し、姉お菊の仇討ちに向かう場面もあるが、直接参照されたとは考えにくい。

二二 「播州皿屋敷并入梅松」（『播陽万宝知恵袋』（天川友親編、宝暦二年（一七五二））所収）。末尾には「右皿屋敷は何人の記しといふをしらず、友達のかたにありしをかり求め、うつしとりて所持す。尤もその作者は後にたづねきくべし」と、三木石狸子による跋文があることから、宝暦年間以前にすでに一定の話型を持つ伝承が流布していたことがうかがわれる。橋本政次『姫路城史』には同系の実録『播州皿屋敷実録』（全十三巻）の梗概が紹介されている。なお、近年発表された同系の実録として、『播州皿屋鋪細記』がある。姫路市立図書館所蔵。「弘化二年（一八四五）乙巳写」という奥付がある。注二に挙げた『皿屋敷 幽霊お菊と皿と井戸』によって現代語訳によるあらすじが紹介されている。

二三 現物未見。旭堂小南陵『続 明治期大阪の演芸速記本基礎研究』（二〇〇〇年、たる出版）所載の梗概に依って内容を確認。

二四 注二三に同じ。

二五 悟道軒円玉の『実説怪談 番町皿屋敷』第一席には「是は明治三十八年二月神奈川県鶴見の隠宅に於いて世を去りました先師松林伯円得意の読物でございました。それを私が口写しに教へを受けました故、差出す事にいたしました」とある。結末など多少の違いはあるが、大筋は伯円『小説』の話型に則っている。

二六 辻番付「吉田御殿招振袖／義経千本桜／当的神明社掛額」（明治二十四年）
早稲田大学演劇博物館 近世芝居番付データベース 登録№ 22-00053-0123
https://archive.waseda.jp/archive/detail.html?arg={%22subDB_id%22:%2279%22,%22id%22:%22428935;1%22}&lang=jp
（二〇二六年一月四日最終閲覧）

二七 田村成義『続々歌舞伎年代記 乾』（市村座、一九二二年）巻の二十八、明治二十八年条。

二八 明治二十八年六月十六日『読売新聞』朝刊、（鈴木）芋兵衛「演伎座評判」。

二九 明治二十八年六月十六日～十八日『読売新聞』朝刊、（鈴木）芋兵衛「演伎座評判」。

三〇 辻番付によると、外題は「怪談新説皿屋敷」であるが、内容は『怪談実説皿屋敷』と同一である。
早稲田大学演劇博物館 近世芝居番付データベース 登録№ 22-00054-1060
https://archive.waseda.jp/archive/detail.html?arg={%22subDB_id%22:%2279%22,%22id%22:%22429707;1%22}&lang=jp
（二〇二六年一月二十八日最終閲覧）

三一 神戸映画資料館・調査研究事業「怪談 皿屋敷［仮題］」解説。
https://kobe-eiga.net/kfpnet/2019/03/50008/（二〇二五年十二月二十八日最終閲覧）

三二 日本映画データベース http://www.jmdb.ne.jp/1929/be001880.htm（二〇二六年一月二十八日、最終閲覧）、『キネマ旬報』（三二四号、一九二九年）による。

三三　瀧口雅仁著『講談事典』（丸善出版、二〇二三年）。

三四　旭堂南湖氏より直接ご教示いただいた。連載の紙面は、国立国会図書館マイクロフィルムにより確認。

【参考文献】（注に挙げたもの以外）

・伊藤篤『日本の皿屋敷伝説』（海鳥社、二〇〇二年）
・菊池真一『講談資料集成』一～三、（和泉書院、二〇〇一年～二〇〇四年）
・旭堂小南陵『明治期大阪の演芸速記本基礎研究　付録・東京速記本目録』（たる出版、一九九四年）
・中込重明『明治文芸と薔薇―話芸への通路』（右文書院、二〇〇四年）
・姫路文学館展示図録『怪談皿屋敷のナゾ―姫路名物お菊さん』（二〇一八年）
・向井芳樹他校訂『豊竹座浄瑠璃集（二）』（叢書江戸文庫 11、国書刊行会、一九九〇年）
・目時美穂『たたかう講談師―二代目松林伯円の幕末・明治』（文学通信、二〇二一年）
・吉沢英明『講談関係文献目録 明治・大正編』（一九七六年）
・吉沢英明『講談明治編年史』（一九七九年）
・吉沢英明『講談明治期速記本集覧 付落語・浪花節』（一九九五年）
・吉沢英明『二代松林伯圓年譜稿』（眠牛舎、一九九七年）
・吉沢英明『講談作品事典』上・中・下（講談作品事典刊行会、二〇〇八年）
・吉沢英明『講談作品事典』続編（講談作品事典刊行会、二〇一一年）

【参考論文・資料】

・渥美清太郎「系統別歌舞伎戯曲解題（91）」（『芸能』九巻六号、芸能発行所、一九六七年六月）
・渥美清太郎「系統別歌舞伎戯曲解題（96）」（『芸能』九巻十一号、芸能発行所、一九六七年十一月）

・今岡謙太郎「落語・講談と歌舞伎」（延広真治・山本進・川添裕編集『落語の世界1 落語の愉しみ』、岩波書店、二〇〇三年）
・神林尚子「講談と『近古実録』―松林伯円作の継承と明治の「実録」―」
（『幕末・明治期の巷談と俗文芸―女盗賊・如来の化身・烈女』第Ⅰ部第八章、花鳥社、二〇二三年）
・菊池真一「明治期京都の講談―京都日出新聞に見る」（『甲南女子大学研究紀要』創立30周年記念号、一九九四年三月）
・菊池真一「明治期大阪の講談―大阪毎日新聞に見る」（『甲南女子大学研究紀要』三二号、一九九五年三月）
・森山重雄「皿屋敷の系譜と『彩入御伽草』」（『江戸文学』六号、一九九一年六月）
・森山重雄「皿屋敷の系譜と『彩入御伽草』（続）」（『江戸文学』七号、一九九一年十一月）

※原文引用に際しては、漢字は新字体に改め、適宜、句読点を付した。また、ルビは省略した箇所がある。